

60372

教科書文庫

5

810

45-1948

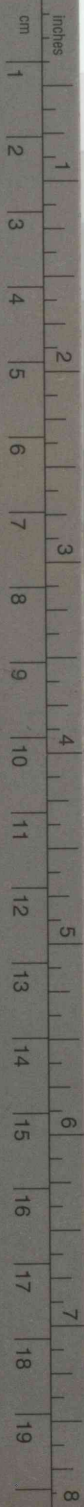
01304
49677

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

教科書文庫
5
810
45-1949
0130449677

文部省著作教科書



中等國語 三

文部省

(3)



教科書文庫

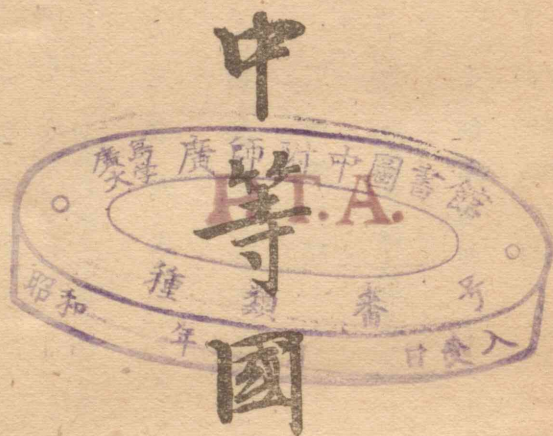
5

810

45-1949

0130449677

中央図書館



中
等
國
語
三

文
部
省

広島大学図書

0130449677



(3)

広島大学図書

0130449677



目 録

一 雪の朝……………一

二 自然の美と美術の美……………三

三 噴火山……………十二

四 読書について……………十七

五 随筆二題……………二十三

六 社会を自己の中に……………二十八

七 師弟一如……………三十六

八 学校日記……………四十九

附 録 國語學習の手引……………五十五

一 雪の朝

雪の朝

まぶしい雪のはねっかえし。

青さ。

さらさら子たちははしゃいで、

跳びあがったりもぐったりしての鬼ごっこだ。

あい。

まぶしい光のはねっかえし。

自分の額にもさらさら子は映り、

うれし。

空はぐうんとまえに乗り出し、

天の天まで見え透くようだ。

空

霜柱のたんぼにたてば、
空いちめん青はみち、
空いちめん冬はみち、
どこまでも続く日本の空に、
冬と青とはみち／＼している。

寒波のさしむ空から見れば、
日本列島のゆるやかな線は、
あわだちの白いレースにふちどられ、
美しい夢のようにまひるをせずかに眠っている。

霜柱のたんぼにたてば、
陣々の冬は精神のごとくつよくはげしく、
新しいエネルギーを燃せとごとくに、
大きく高くひらけている。

二 自然の美と美術の美

人工にとって、自然は常に師である。個人的には一画家の作品は、常にその画家の見る自然の足らぬ表現であり、人類全体としては、美術家としての人類は常に自然の絶大や微妙の前にひびきすく。しかし、自然の美というものは、実は外にあるものではなく、むしろわれ／＼人間の心のうちにある。外にあるものはたゞの物質にすぎない。その心なき物質が、「自然の美」とされるには、そこに人間の心が加わらなくてはならない。美は人類のうちにある一つの要求であり、また意志である。善と眞を欲する人間の精神は同じく美を欲せずにはいられない。均齊せいとか調和とかいう美の標準も、外から定められたものではなく、われ／＼が内に持つ、自然の美の本能によって生まれるものである。われわれが自然物の諸象の前に立って、あるいはそれを美しいと感じ、あるいはそれからさしたる感興を受けず、あるいはむしろ不快の感を起すなどのことは、みなこの本能の標準によって不知の間にそれを審査しているのである。

かくて、自然の美というものは、外のみにあるものではない。そういう組織や要素は外にあるにしても、それを美とするものはわれ／＼のうちにある。自然の美とは、そういう無情無常の諸現象とわれわれの心が合致して生まれる暖かき子供である。そして、美術の美とは、それを人間の手工によって表現したものである。もつとも、純粹の裝飾美術や建築などは少し違ふ。それは自然の美の表現というよりも、人間の「内なる美」がもつと直接に現われたものだから。

かくて、自然の美というものも、結局人類によってこの世界にもたらされたものであるということができる。しかし、それならなぜその自然の美を表現し盡くすことができないのか。このことに二つの原因がある。元來、表現というものは手工によらなくてはできない。手工とは人間の肉体的能力の一つである。即ち自然の物質的能力の一つであり、その中でもかなり狭小な能力にすぎない。ところが自然の美、即ちその手工に対する内容は、無限のものを見うる人間の精神の能力である。人力と一口にいっても、一方は肉体の力、一方は精神の力である。しかもその精神によって見られたところのものは、物質ではあるが、人間の限りある肉体的能力とは比較にならぬ、ほとんど無限の、大無限の微を持つ自然力によってできたものである。たゞに精神を去ってしまつて、その物質的の力だけにして、とうてい、手工は自然力には及ばない。ましてそれを精神の力をもって美としたものを、限りある手工が盡くしえないのは当然である。この二つの原因が、自然の美を永久にわれ／＼画家にとつてなぞとさせるのである。

かくて人工は常に自然を師とし、これに仕え学ばなくてはならないが、しかしこのことをもつて人工は侮蔑されるべきではない。それは人工の尊さを知らぬ人の軽はずみな言である。もとより人工の小器用さに慢じ、それを濫用し、自然をないがしろにすることはいけない。それはむしろ人工にとつての敵である。かゝるものに対して、自然のあくまで大きく、人工のそれに比べて小さいことを説くのは当を得ている。しかし、そういうものがあるからとて、本來の人工は軽蔑されるべきものではない。ばくは画家だから人工の軽蔑されることは不服である。

一方においては、美術は自然の美の永久の弟子であるけれど、また一方においては、美術はこの世界における唯一の美の客観的実在である。この世界において、人間の精神が形を與えられ、客観的の實在とされたところのものは、美術の美のほかに求めることはできない。すべての自然の美はたゞ個人の主観に宿る。だからそれがいかに深いものであつても、また永遠なものであつても、それは瞬間にして消える。こゝに表現の要求が生ずる原因があると思われ、一たびそれが表現されれば、その美は確定され立証され、またある程度まで永遠的な實在とされ、かくてまた幾世万人の共有とされる。ひろんその表現は、その主観を盡くすことはできない。製作にはどうしても表現し盡くせないものが必ず残る。追えば追うほど、表現ができればできるほど、先へ／＼と深い美が見えて、とうていそれを捕らえ盡くすことはできない。その美はついに表現されることなく、画家の心の中に取り残されてしまふ。しかしこの最も深き美の剰余は、ついにこの世界に表わされないうで消えてしまふものだらうか。少なくとも主観的にはそうである。作家自身が深い美を見ることができればできるほど、この表現し盡くせない美の剰余を感じるはずである。しかしその表現し盡くせない美は実に唯一の表現の動力である。その美があればこそ表現がそこまでできるのである。その美が深ければ深いほど、その表現はそれを追つて深まる。またその表現が深まれば深まるほど、その美は深い所へのがれて行く。一つを捕らえればまた一つ、常に先へ／＼とその美は見えて来る。永久に捕らえることはできない。しかし、また一方からこれを見る時は、そういうふうな美が先へ／＼と余つて行くといふことは、とりもたず、より深い美を捕らえて行つていくことになる。捕らえて行くからこそ、捕らえきれないものが先へ／＼と見えて来るのだ。かくて表現しきれずに残る美の深さは、表現できた美の深さによつてその價值も違ふ。だから、ある画家がどうしても表現できない美も、他の画家の表現に及ばな

いということがある。こゝに作品の成長ということがある。初期の作と生長してからの作の美の深さや複雑さが違うのはこの理由によるのである。初期の作でどうしても表現し盡くせなかつた美も、だんだん修練して行くうちにはいつしか捕らえている。しかし、もっと大きな美だが、その時は目先に控えているということを、本道を通る画家は経験する。

だから、このどうしても表現し盡くせない美の剰余というものも、つまりは表現の一つの材料と見ることが出来る。その美の一つ手前までの美を表現させるのになくはならぬ力は、その表現し盡くすことのできない美の力である。かくて、表現は見ることを深くさせ、見ることはまた表現を深くさせる。かくて、表現とその見るところの美とは、表現し盡くせない最後の美を余して一致する。同じものとなる。こうしてついに、その画家の最上の傑作の時に残された美は、その画家の命とともにこの世から消えてしまう。それだけを思つてみると、人工というものがなんだかあつけない氣もする。その最後の美の深さや尊さを思うと、いかにもそれが表現されずに終ることは惜しい氣がする。少くも画家にとって主観的にこの氣持は強い。自然の美しさにはとうてい及ばないと嘆くのはこの氣持である。しかし、幾度もくり返すが、この最後に残される表現し盡くせぬ美を見ればこそ、そこに表現を欲する心が生じ、またそれだけの深い表現がなされるのである。またこの表現によつて、その美を確實に捕らえ、証拠だて、現実に具体化して行かなくては、より深く／＼その美を追求して行くことはできない。最後に残る美を表現し盡くせないのは惜しいけれど、その惜しい美が先に見えていたからこそ、それほど深い表現がこの世に、ものになつてゐるのだ。こゝに自然の美が永久に画家の師であると同時に、美術の美がまた永久に自然の美の新しい創見である原因がある。レオナルドの言

に、「自分の絵は常に描き足りない未完成のものであるけれど、もし他人が自分にそういうことを言へば、自分は許さない。」という意味のことがあるのを讀んだことがあるが、さすがはレオナルドの言だと思つた。レオナルドの絵を見て、われ／＼は描き足りないとは思えない。盡くしていないとは思えない。むしろその反対に、自然のまだ知らない美を教えられる。よし見方の相違を感じることが出来るにしても。

かくて、この表現し盡くせぬ美を惜しむのは、どちらかといへば画家の主観に宿る心持である。第三者は知識的以上にそのことを考へることはできない。即ち推察以上に、それと同じ感じをその作品に対しては持つことができない。これはその美がその人一個の主観であるからだ。その主観が深ければ深いほど、人にはそれを推察することさえできなくなる。一般的に言つてみれば、自然の美を永久に師とたゞえるのは、人類の中の美術家としての人類の心である。だから客観的には、美術は自然の新しい美の発見となる。これは、人類の中の鑑賞家としての人類の心持である。この二つの心持は少しづつなら凡夫にも與えられてゐる。人類は、美術に対して主観的になる時、その師として自然をたえ、客観的になる時、自然を教える師として美術をたゞえる。こゝにこのことが最も深く現われた一例をとつてみれば、かのモナリザに三年を費やしても、なお自分では描きあがらないとしていたレオナルドが、システンにおけるミケランジェロの偉業を見て、頭髮が白髪に化したかと思われほど驚いたという言い傳へがある。自然を見ることの深さでは、レオナルドはミケランジェロにまさるとも劣りはしない。そのレオナルドが、自分の製作には三年も費やしてなお盡くしきれぬ美を追いながら、若いミケランジェロの仕事に驚嘆したのはなぜか。美術における主観的の見方と客観的の見方と

の相違である。普通の人たちがさう自然の美をほめた口で、きょうつまらぬ絵の前でも、「絵にすればこんなものでも美しい。」というのも、このことが卑近に現われた一例にすぎぬ。

しかし、主観的に創作にあたって表現し盡くせなかつた美も、客観的には必ずしも表現されずに終つてしまふものということはできない。あるところまでは、それはその作品の無形の領域即ち精神となつてその底にこもる。これはその作家でさえ自作を第三者の心になつて見ることができれば、感得できることである。このことは、自然の美というものがいかに深いものにせよ、その物質上の力を除いてはみな作家の精神の力によつて創め生まれたものであるからである。画家は、自分の見る最深の美を形の上に表わしきすることはとうていできないけれど、その深さはあるところまでは無形の力となつて作品の底にこもり、見る者にその力を感得させる。こゝに美術の美の独立がある。すぐれた美術の持つ味というものはそれだ。この全体から来る深い味というものは、作家の内なる最も深い主観の現われである。それは形の上に現われるけれど、その感じは形以上のものである。そこにわれ／＼は作家の深い、量ることのできない心を見る。この味は必ずしも作家が自然のうちに意識したものである。作家の意識した美をできるだけ表現した後にはこの味はにじみ出る。その努力が深ければ深いほどその味も深くなる。これは画家の精神の無形な具体である。画家が意識した美を追求に追求して、最後の美をのがした時、そのかわりとして、そのために費やした精神の力は、その筆跡の一々の後にこもつたその作品の上に来たり加わる。もちろんこの味(画面の効果)には、人力でどうすることもできない運命の力も加わつてはいるけれど、それにも増して内の精神の力がそこに生かされているのを感じてゐる。

画家はこの「味」によつて十分にその精神を表現することができる。それは肉体的手工をもつてはとうてい出せぬ感じである。かくて画家は、自然の美の最も深いところを、その表現が肉体的の能力であるために、一方には逸するけれど、また別にその精神を無形の美としてその作品に宿すことができる。これは精神によつてなされる仕事の必然の結果である。

この作品にこもる精神の感じと、その作品を作つた画家が惜しむ最後の美の剰余と、いずれが深いものかということとはちよつとわからない。この味というものは、作家自身には第三者の見るほど感じられないものであり、また作者の見た美の最後の深さは、第三者には想像以上にはわからないことであるからである。しかし作家の見る、表現できない最も深い美の深さを思うと、作品にこもる精神が必ずそれを語り盡くしているということは言えない感じもする。第三者の立場からではなく主観的に考へてではあるが、このことは画家である自分の見る自然への崇敬の心持から否定することはできない。しかし、それと同時に、たとえ画家の見る最後の美を盡くしきらずとも、美術は人類の精神の美しさを、許されるだけ十分にわれ／＼に示す唯一のものであることを自分は認めるものである。

かくて美術はこの世界における唯一の、美の客観的な存在である。美術の美のほかに美をさがせばそれは人の心の中にしかない。美術の美は客観的に見てこの世界における唯一の美の存在である。それは人間の精神の美しさの唯一の具体である。表現はかくてこの世界における唯一の美の使徒である。美術の美にはこの感じが露骨に語られている。人々はりっぱな美術の前に立つ時、そこに美の王國を感じる。そこにあるいつさいの人畜・花鳥・草木・岩石、あらゆるものはすべて美のみの存在としてある。それは美以外のつとめをしていない。

具体的に言う、これは美術というものは、自然の美を、画家が内にあらずと本能的に持っている無数の美術品の要素に代えて表わしたものだからである。

この美術品の要素は、自然の美のように主観的な美ではなくて、無形ではあるが、自然の一つとして唯一の客観的な美の要素である。自然は一つとして美という意義で存在しているのではないが、ただこの無形の要素だけは美という意義があつてはじめて存在する。画家は、主観の美をこの要素を通じて客観的に生かす。これが美術であつて、その美はかくて、この世界における美の客観的な唯一の實在である。

この美術の殿堂は、太古より今日までの人類の精神の全力を盡くしてこの地球の上に建てられている。その美は深くまた偉大である。その殿堂に参じたあらゆる個人はその美にうたれて、自然の前でしたようにひざまずく。

しかし、またわれ／＼は自然の前になぞを失わない。いな、りっぱな美術を見れば見るほど、われわれはまた更に自然の美を慕う。このことはあらずから人間の精神の無限であることをわれ／＼に示すのである。

かく言つたとて、古來からのいっさいの美術をあきたらぬものとするのではない。われ／＼はりっぱな藝術の前に立つて教えられこそすれ、それにあきたらない感じは抱かない。われ／＼はたゞ異なつたものを見るのだ。深さを必ずしもこの世界に、よりいっそう増そうとするのではない。たゞわれわれの興えられた特性をその深さにまで生かせばいいのだ。

われ／＼は、すでに表現されたすぐれた美を見ることによって、いまだ表現されな／＼の自然の美を見るかぎを興えられるのだ。

すでに表現されたいっさいのりっぱな美術と、いまだ表現されない自然の美とは、ともにわれ／＼に製作の欲望を燃えさせる。一つは形を興えられんことを欲し、一つは形を作ることの喜びを示す。かくて人工は永久に榮える。人間が自然になぞを失わない間は、人間の心に自然の偉大を美しいとする力がある間は、人工は永久にそのよき弟子として、また子としてこの世界に榮える。

これで、だいたい自然の美と人工の美については今言えるだけのことは言つたが、終りにもう一つ、人工が自然と比較されて軽んぜられるある場合について附加しておく。

人工がとうてい自然に及ばないという考えは、美術家の主観として、または美術家としての人類の主観としては正しいけれど、この言はたゞさういうところからばかり言われていない。人工はある時は自然の天真という意味に対して、虚飾という意味を加えられて、不当の侮辱を受けている。人工的ということとはあまりいい意味ではない。もとよりことばの用い方の問題だとしてしまえばなんでもないが、そのため不知の間に、ある誤つた観念ができていたのでちよつと附言しておく。

人間はみずからの弱さから、いつのまにか人工ということ、装飾ということを、その純粹の動機を汚しました。また冒して、自己の醜をいつわり飾るといふ動機の方に悪用するようになった。作るといふことは天真を隠す作意と混同され、飾るといふことは虚飾の意味を加えた。その上に純粹の動機で作られたほんとうの美術や装飾が、ほんとうの心で愛されずに、やはり虚飾や虚榮の材料に使われることもある。

こうして、「ソロモンの榮華の極みもゆりの花の一つに及ばない。」というような考えが、いつのまにかわれ／＼の間に深く根を張つてしまつてゐる。このことは人間の虚偽や浮華に対して言われること

ばで、野のゆりの純真さはそのいつわりをわれ／＼にほんとうに示してくれる。しかしその野のゆりの美しさを感じる心はまた純真な造形の要求の動機で、そのためには同じ心の内なる美があることを忘れてはならない。

心ある人にはわかりきったことで問題にもならぬことだが、われ／＼は虚偽や虚飾に悩むあまりに、ほんとうの造形を軽んじてはならない。よし虚飾のために用いられているにしても、その美術が純粹な心持で作られたものなら、それは尊ぶべきだ。用いる動機によって光を失うものなら、盗んで賣られようとしたモナリザはとうにその光を失っているはずだ。

こんなことはわかりきってはいるけれど、人間が裝飾や造形の本能を自己の物質的な目的のために悪用する時代が過ぎない限り、それに対する輕侮が、一部の人によって、ひいては本來の人工の上に加えられるのもしかたのないことである。

たゞなんとなしにいやしめられる、自然に対する人工ということばの感じのために、一應附言したまでである。

人工は自然とともに常に純真だ。ともに光るべきである。

(岸田劉生著「美の本体」による)

三噴火山

この「噴火山」は、アンデルセンが三十一歳の時に書いた出世作「即興詩人」の一部である。イタリア旅行の印象を背景に、少年アントニオを主人公にした美しい物語で、アンデルセンの幼年時代・少年時代のことが、いろいろと織りこまれている。

これを訳した森鷗外は、本名を林太郎といい、官職は軍医であったが、明治のすぐれた文学者として、外國文學の翻譯、歴史小説その他種々の創作など、文學界に輝かしい業績を残している。

原作の持ち味を十分に生かして、美しい雅文に訳したこの「即興詩人」の翻譯は、九年もの長い年月をかけてなされたもので、当時の文壇に強い刺激を與えたものであった。文中のむずかしい語句を調べ、このすぐれた訳文を味わいながら、このような文体をも理解するようにしたい。

熔岩は月明かりにて見るべきものぞとて、われらは暮にいたりてヴェスヴィオに登りぬ。レジナにてうさぎうまを雇ひ、ぶだうばだけ、貧しげなる農家など見つゝ乗り行くに、やうやくにして草木のいきほひ衰へ、はてはかたはになりたる小澗木半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明かけれど、強く寒き風はたちまち起りぬ。まさに没せんとする日はさかりなる火のごとく、空をばこがね色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なるむらがる島嶼をば淡青なる雲にまがはせたり。まことにこれ一の夢幻界なり。入江に沿へるナポリのまちは次第に暮色微茫のうちに没せり。ひとみを放ちて遠く望めば、雪をいたゞけるアルピの山脈氷もて削りなせるがごとし。

くれなる熔岩の流れは、今や目睫に迫り來たりぬ。道絶ゆる所に、黒き熔岩もておほはれたる廣き面あり。うさぎうまはひづめをくだすごとに、まづ探りてしかる後に踏み。すでにして一の隆

起したる所に会ふ。そのさまあらたにこの熔岩の海に涌出せる孤島のごとし。されどその草木はたゞたけ低き灌木のまばらに生ぜざるを見るのみ。この所に山上の小屋あり。兵卒数人火を囲みて聖酒を飲めり。(ラクリメーカーリクスナーとてぶだう酒の名なり。)こは遊覽の客を護りて賊を防ぐものなりとぞ。われらを望み見て身を起し、松明を点じて導かんとす。劇しき風にほのほは横さまに吹きなびけられ、消えんと欲してわづかに燃ゆ。博士は疲れたりとして小屋にとどまりぬ。われらの行手は岩の間なる細道にて、熔岩の塊のひづめに触るるもの多し。処々道の險しき谷に臨めるを見る。

すでにして黒き灰もて盛りなしたる山上の山ありて、われらの前に横たはりぬ。われらはみなからだちとなりて、うさぎうさをば口とりのわらべにあづけぬ。兵卒は松明振りかざして斜に道取りて進めり。灰はくるぶしを没しましたひざを没す。石片または熔岩の塊ありて、歩ごとにまるがり落つるが故に、縦に並びて登るに由なし。われらは双脚に鉛をかけたるごとく、一步を進みてはまた一步を退き、たゞ一つ所にあるやうに覺えたり。兵卒は、頂近し、今一息に候と叫びて、われらを励ましたり。されど仰ぎ見れば山の高さこと始めに異ならず。ひと時ばかりにしてわづかに頂にいたりぬ。われは奇を好む心に驅られて、直ちにきびすを兵卒に接したれば、まづ足をこの山の頂に着けたり。頂は大なる平地にして、大小いろ／＼なる熔岩の塊錯落として道に横たはる。平地の中央に円錐形の灰の丘あり。これ火坑の堤なり。火球のごとき月は早く昇りて、この丘の上にかゝれり。われらの來路にこの月を見ざりしは、山のためにさへざられぬればなり。たちまちにして坑口黒けぶりを噴き、あたりやみ夜のごとく、山の核心とおぼしき所に不断の雷声を聞く。地震は足危ふければ、人々あひよりて支持す。たちまちまた千百の巨砲を放てることと声あり。一道の火柱直上して天を衝き、

ぼとぼしり出でたる熱石は「ルビン」をはめたるごとく靨をなせり。されどこれらの石はあるひは再び坑中に没し、あるひは灰の丘に沿ひてころがりくだり、またわれらの頭上に落つることなし。われは心裏に神を念じて、屏息してこれを見たり。

兵卒は、まらうどたちは山のきげんよき日に來あはせたまひぬとて、われらをさしまねきて進ませめたり。われははじめそのいづくに導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。たちまち見る、われらの行手に火の海の横たはれるありて、身のたけ数丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これわれらに先だてる旅客の一群れなり。われらは手足を動かして熔岩の塊を避けつゝ進めり。色あせたる月の光と松明の火とは、岩のくま／＼に濃き陰翳を形づくりて、深谷の看をなせり。

たちまちまた例の雷声を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りてやうやく進むに、石土の熱きを覺ゆるにいたりぬ。岩罅よりは白き蒸氣騰上せり。すでにして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔岩なり。風に触るる表層こそは黒く凝りたれ、底はなほ紅火なり。この一帯のかなたにはまた常の石原ありて、一群れの旅客はその上に立てり。導者はわれら一行を引きてこの火殻を踏ましめたるに、足跡あぶるがごとく、われらのくつの黒き地に赤きあとを印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。ところどころに断文ありて、底なる火をすかし見るべし。

われらのはかの旅客の群れに近づきて、これと同じく一大石の上に登りぬ。この石の前には新しき熔岩流れくだれり。たとへばこがねの熔炉より出づるごとし。その幅はさへめて廣し。蒸氣のこの流れをよほへるものは火に映じて殷紅なり。あたりは暗黒にして、空氣には硫黄の氣満ちたり。われは地

底の雷声と天半の火柱とこの流れとを見聞きして、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覚えたり。われは胸さきに合掌して、神よ、詩人もまたなんぢの預言者なり、その声は寺裏に法を説く僧侶より大いなるべし、われに力あらせたまへ、わが心の情きをもりたまへと念じたり。

われらは歸途につきたり。この時身辺なる熔岩の流れに、爆然声ありて陷筭を生じほのほを吐くを見き。されどわれはまたおのゝき震ふことなかりき。一行は積灰のあらたに降れる雪のごとをけて、かつ滑りかつくだるほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覚えざりき。われもフェデリゴも心にこの遊びの徒事ならざりしを喜びあへり。うさぎうまに乗りて小屋にいたれば、博士は踞坐してわれらを待てり。促し立ててともに出づるに、風をさまり月明らかなり。ナポリ灣に沿ひて行けば、熔岩の赤き影と明月の青き影と、波の面に二條の長蛇ををどらしむ。聞くならく、昔はポッカチオ涙をヴィルギリウスのつかにそゞりて、誓を天下にはせたりとぞ。われ非才、もとよりこれに比すべきにあらねど、けふヴェスヴィオの山のわが詩思を養ひしは、いまだ必ずしもひかし詩人のつかのポッカチオの天才を發せしに似ずばあらず。

博士はわれらをいざなひてその家に歸りぬ。われは前度の別れを思ひて、サンタ夫人との應對いかがあらんと氣づかひしに、夫人の優しく打ち解けたるさまは、毫もさきの日に異ならざりき。夫人はわが即興の手ぎはを見んとて、こよひの登山を歌はせ、ことばをきはめてわがごえをほめたり。

(アンデルセン作、森鷗外訳「即興詩人」による)

四 読書について

私は、書物については、どんなものを読んでもよいと考えている。あれを読んではいけない、これも読まない方がいい、というような言い方はいけないと思う。しかしながら、どんな書物でもわれ／＼が読んだからには、何かの形でわれ／＼の中に残るものである。それに対して自分に責任を負う覚悟がなければならぬ。つまらない本を読めばつまらない本を読んだように、よい書物を読めばよい書物を読んだように、どんなに読めばどんなに読んだように、ていねいに読めばていねいに読んだように、何かの形でその読んだ本は必ずわれ／＼の中に残る。それはわれ／＼が生きている限り残る。あそらくわれ／＼が死んでからでも何かの形で残る。いや／＼、この宇宙の存在している限り、それは何かの形で残るのである。それはもちろん何人にも氣づかれないものであろう。目に見える世界の運行の上には決定的な意味を持たないかもしれない。しかしながらどんな小さなことでも、その一つのことになかったならば、世界はそれだけ変わっているはずである。世界の運行の上には、それは億兆万分之一の更に億兆万分之一の——いや／＼、こんな言い方ではとても数えられない小さな力しか持たないかもしれない。しかし、どんなに小さな力としてでも、それだけのものとして何かの作用をしているのである。これをほんとうに身にしみて考えたら、われ／＼はめったにつまらない本を読むことはできないはずである。

それではどういふ書物をどう読んだらよいのかということになるが、これは年齢・境遇・教養に

よつて十様には言えないことであらう。しかし、これぐらいのことは一應言つてもよいであらうといふ、だいたいの基準は與えることができる。

第一には、ゆつくり読む、そしてくり返して読むことである。これは一番平凡なことであるが、実は一番たいせつなことであると思つてゐる。たくさん書物を速く読んだ方がいいという場合もある。例えばみなさんの場合であるが、学生という境涯はあらゆる意味で基礎的な教養を作る時であるから、多読が必要でもあれば可能でもあると思う。しかし、それはどこまでも基礎を作るのであって、それ自身建物を建てることではない。ほんとうに建物を建てるためには、どうしても、ゆつくりくり返して読まねばならないのである。これははっきりした自分を築きあげることでもあれば、また自分の仕事を築きあげることでもある。

よく多読と精読とどちらがよいかということの問題にする人があるが、これは必ずしもあれかこれかの問題ではない。多読と精読とはあわせ用うべきものである。一般的には多くの書物を速く読む。しかしながらこれと思ふ書物はゆつくりとくり返して読む。これが着実意健な読み方である。しかし、もし多読と精読と、その一つをどうしても選ばなければならぬとしたら、私はどこまでも精読主義をとる。

私は何かのうちに、近ごろよく昔の人がえらかったことを改めて感ずるのである。その理由はいろいろあるけれど、少なくとも一つの理由は、昔の人たちが今日のようにたくさん書物に煩わされることなく、わずかの良い書物をゆつくりくり返して読んだからである、とそう考へている。

第二には、書物に対するにはまず心をむなしくしてその書物の中に没入しなければならぬといふ

こと、これが肝要である。中には没入できない書物がある。第一にはつまらない書物である。この場合には、われ／＼はすぐさまページを閉じてよろしい。たゞ一つの反省を忘れないなら——というのは、書物というものは結局われ／＼が在る程度にしたがつてしか、つまり自分自身の器量にしたがつてしか、それを受け取ることができないものである。だからつまらないと思ふことは、ほんとうにその書物の内容が自分以下であることも考えられれば、そうではなくて、われ／＼の理解を絶するほどに深いとも考えられるからである。その反省を、もし忘れるならば、大きなあやまちを犯すことになりかねない。しかしそうかといつて、われ／＼は自分が在る程度にしかものを理解することができないのであるから、正直につまらないと思つたらそれをどうしようもない。読む本はたくさんあることであるから、直ちにページを閉じて他の本に向かつてよいのである。しかし更に、難解でその書物の中に没入できないということもある。このむずかしいということも実は單純ではない。こちらに罪がなくして向こうに罪のある場合もある。書いてゐる方がわかつてゐないことを書いてゐるために、むずかしくなつてゐるといふ場合がそれである。

青年諸君は、難解という事実常に魅惑を感ずるものである。読んですぐわかるようなものはよいものとは思わない。これが、ことにまじめな読書家の心理である。この心理には正当なものがある。読書において眞にわれ／＼を鍛えるのは、そういうふうに完全にはかみ砕けないようなものに、どこまでもかみつくことである。読んですぐわかるような書物は、だからもの足りない——更につまらないと思ふのは当然である。しかしそういう場合ではなくて、全然わからないものを、つまり、かみつきやうもないものをありがたく思ふやうな、そういう心理もある。この心理は一言では片づけられない

い心理であるが、そこから、いわば不当に難解な、即ち書いてある当人の思想の未熟や誤訳のために難解になっている、そういう書物がありがたがられるという現象が見られないでもないのである。これは、現代のわれ／＼の一つの不幸である。この不幸が正当な理由、即ちわれ／＼がそれにかみつくに價するような難解な書物だけをありがたく思うという、ごくまじめな読書家の心理を土台にしているところ、二重にされている。

第三に、われ／＼は自分の根本信念なり思想なりによって、その書物と対質しなければならぬ。全くその書物の中に没入できて、われ／＼自身の心を働かせる余地のないような書物もないではない。正しさとか深さとかのほかに、美しさという性質があつて、これがわれ／＼をとりこにする場合もある。しかし、たいていの書物は、どんなにうっげな書物であつても、どこかにわれ／＼を納得させないところがあるものである。この点は自分にはこうは考えられない、この点は自分の考えと違ふ、というばかりでなく、言っていることはもつともだが、世界・感情が違ふというような場合もある。読み方が足りないためにそうなることもあるけれども、どんなに読んでもそうなる書物が多い。これは、どんな書物でも、どこかにやはり矛盾を藏しているものが多いというばかりでなく、また、われ／＼の教養なり、思想なりとの間のくい違いによるのである。その矛盾を含んでいるということが、内容を多面にしたり多彩にしたり、その書物の魅力となることの多いのを考えれば、この問題は単純な問題ではないのであるけれども、しかし、ほんとうに書物を読みぬくためには、やはりどこまでもそれにくいさがらなければならぬ。

この場合には——この場合ばかりではないが、こわすこと即ち作ることである。ほんとうに書物を自分のものにするということは、その書物に書かれてあることを、その秩序のまゝに受け入れることではなくて、その書物に書かれている内容を一度解さばくして、自分自身の秩序にそれを組み立てることである。ほんとうに理解するということの中には、いつもその二重の作業が含まれている。二重の作業が一つになるところに、即ち破壊することが組み立てることになるところに、自分のものにするということの眞の意味があるのである。

第四は、すぐ第三の問題と結びつく。それは批評精神を忘れてはならないということである。批評精神とは、決して成心をもつてものに対することではない。批評ということは、何よりも対象を正しく見ることであるから、それにはどこまでもその対象の中に心をひなしくして入りこむということが必要なのである。たゞ批評ということとは、同時にあくまでも自分自身を固持することである。自分のないところに批評はない。いかなる批評でも、それが批評である限り、一つの自己主張となる。これは、最初から何か出来合いの一定の形を持った批評精神というものをもって対することではない。結果として出て来ることである。そして、自分というものを持っている限り、それは結果としては必ず出て来るのである。夢中になって読むということは、美しいことである。書物からわれ／＼は理屈以上に、感情や意志をも受け取るものであつて、そういうものを純粹に受け取れるのは、夢中になって読むことからである。しかし、自分の考えも氣持も確かな中心を持って来ると、そういうことはだんだんなくなる。そして、それはそれで自然の成長としてよいのである。

第五の問題は、読書とは單に受身に物を受け入れるだけではない、一種の創造作用を営むものだ、ということである。批評精神を持つということも、單に受身に物を受け入れることを拒否すること

であるが、創造の作用とは、自分の願いや望みにしたがってそこに何かを読み加える作用である。この読み加えは、根本において読み取りがなければならず、したがって、その人の人間・教養・理解の程度に應ずるものであるが、われ／＼は、書物の中から作者の意識しなかつたものを引き出すことができるのであって、これは読み取りであるとともに読み加えである。あらゆる書物は、自然と同じく、われわれのさまざまな解釈を入れる余地を持つものである。矛盾のあるところには矛盾のあるように、矛盾のないところには矛盾のないように、われ／＼は、それ／＼の立場で解釈を加えることができる。そこに第二の創造があるのである。

この見地から古典を見ると、古典というものは、時代とともに常に新しい面を露呈することによって、それ／＼の時代に、その時代に触れた新しい意義、新しい問題を提示するものである。その意味で、時代とともに成長して来たものである。もちろん、それ／＼の古典がその作られたそれ／＼の時代の制約を持っている。どこかに時代のからをくつつけていたのである。しかし、それが古典である限り、單にそれだけのものではないのであって、それが今日まで生き続けて来たということは、何百年、何千年という長い年月の間、それ／＼の時代にそれ／＼の要求に應じて新しい感受、新しい解釈を許して来たということである。その意味で古典は常に自然のように新しい。古典は第二の自然である。

読書は今日においても、この古典を中心とすべきであると思っている。われ／＼は新しい書物を読まなければならない。新聞も読まなければならない。しかしながらどこに読書の中心を置くかといえ、この古典に中心を置かなければならないと私は思う。

以上のことを簡単に幾つかの命題にまとめてみよう。

第一の命題、われ／＼は自分を没却しなくては書物を正しく読むことはできない。第二の命題、われわれは自分を保持しなければ書物を正しく読むことはできない。第一の命題と第二の命題とはあい矛盾した命題である。第一は自分を没却することを要求しているし、第二はどこまでも自分を保持することを要求している。しかし、この全然矛盾した二つの命題のあい交わるところに、実は書物の正しい読み方があるのである。

第三の命題、われ／＼は現在われ／＼の在る程度以上に、書物から受け取ることができない。第四の命題、われ／＼が書物を読むことは、常にわれ／＼をわれ／＼より以上のものとするのである。あるいは、われ／＼は、現在われ／＼の在るより以上となることによって、はじめて書物を読んだといふことができる。この第三の命題と第四の命題とも、やはりあい矛盾している。しかし、第一の命題と第二の命題との関係のように、こゝでもあい矛盾した二つの命題のあい交わるところに読書の真の意味があるのである。

(谷川徹三著「読書について」による)

五 随筆二題

古典随筆二種を組み合わせて随筆二題とした。

「枕草子」は、清少納言の書いた随筆である。清少納言は、清原元輔の娘で、一條天皇の皇后定子に仕えて

いた。枕草子は、主として宮廷生活における日常生活の経験や感想などを記したもので、自然や人事などに対する女性らしい鋭い感受性が現われている。

「徒然草」は、吉田兼好の書いた隨筆である。これもまた、自然・人事の感想、論議・考証などいろいろに面にわたり、ことに兼好の豊かな趣味性や冷静な知性からにじみ出た味わいの深いものがこもっている。

こゝではそれらの一部分をとりあげたのであるが、この文を学習することによって、昔の人たちの、ものの見方、感じ方、表わし方などを知ることができる。二つの隨筆の特徴を比較して味わってみよう。

一 枕 草 子

清 少 納 言

春はあけぼの。やう／＼しろくなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏はよる。月のころは更なり。やみもなほ、ぼたる飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、からすのねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。まいてかりなどのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと虫のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜などのいと白く、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ・火をけの火も、白き灰がちになりぬるはわるし。

木の花は、うめ。濃くも薄くも紅梅。さくらの花びら大きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。ふぢの花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。うの花は、品劣りて何となけれど、咲くころのをかしう、ほと／＼ぎすの陰に隠るらんと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、あどろなるかさねなどに、いと白う咲きたるこそをかしかれ。青色のうへに、白きひとへがさねかづきたる、青朽葉などに通ひて、いとをかし。うづきのつごもり、さつきついたりなどこのころほひ、たちばなの濃く青きに花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにかし。花の中より実のこがねの玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたるさくらにも劣らず。ほと／＼ぎすのよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。なしの花、世にさまざまよくあやしき物にして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬あぐれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げにその色よりしてあいなく見ゆるを、もろこしに限りなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、みかどのみ使にあひて、泣さける顔に似せて、「梨花一枝春雨を帯びたり。」などいひたるは、おぼろげならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじと覚えたり。さりの花、紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉のひろごりさうたてあれど、また異木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしにこと／＼しき名つきたる鳥の、これにしもすむらん、心ことなり。まして琴に造りてさま／＼なる音の出でくるなど、をかしとは、世のつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまをにくげなれど、あふちの花い

とをかし。かれ花にさまこと咲きて、必ずさつき五日にあふもをかし。

二 徒 然 草

吉 田 兼 好

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初めの矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをよろかにせんと思はんや。懈怠ゆだの心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ万事にわたるべし。

道を学する人、夕べにはあしたあらんことを思ひ、あしたには夕べあらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。いはんや、一刹那いちせなのうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞたゞいまの一念において、直ちにすることのはなはだ難き。

高名の木のぼりといひしをのこ、人をあきて、高き木にのぼせてこずを伐らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、ある時、軒長のちながばかりになりて、「あやまちすな。心してありよ。」とことばをかけはべりしを、「かばかりになりては飛びあるともありなん。いかにかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、「そのことに候。目くるめき、枝危ふきほどはおのれが恐れはれば申さず。あやまちは、やすき所になりて必ずつかまつることに候。」と言ふ。

あやしき下藤かみづかなれども、聖人のいましめにかなへり。まうも難き所をけいだして後、やすく思へば必ず落つとはべるやらん。

一道に携はる人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれ、わが道ならまししかば、かくよそに見はべらじものを。」と言ひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覚ゆるなり。知らぬ道のうらやましく覚えば、「あな、うらやまし。などか習はざりけん。」と言ひてありなん。わが知を取り出でて人に争ふは、角あるものの角をかたづけ、きばあるもののきばをかみいだすたぐひなり。人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大きな失なり。品の高さにて、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひことばに出でてこそ言はねども、内心にそこばくのがあり。つゝしみてこれを忘るべし。をこにも見え、人にも言ひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、つひに物に誇ることなし。

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝに言はんはをこがましとにや、心惑はずやうに返り事したる、よからぬことなり。知りたる事も、なほ定かにと思ひてや問ふらん。また、まことに知らぬ人もなごかなからん。うらゝかに言ひ聞かせたらんは、おとなしく聞えなまし。

人はいまだ聞きおよばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さてもその人の事の浅ましさ。」などばかり言ひやりたれば、「いかなる事のあるにか。」と押し返し問ひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞き漏らすあたりもあれば、おぼつかかなからぬやうに告げやりたらん、あし

かるべきことかは、ものなれぬ人のあることなり。
かやうのことは、ものなれぬ人のあることなり。

六 社会を自己の中に

一

何人も、人は社会の内に住んでいることを承知している。しかしながら、社会が人（われ）の内に存していることに氣のつくものが少ない。そして現代意識は、あまりに前者の意義に氣づきすぎて、後者の意味に氣がつかないことが、大なる欠点である。人は社会の内に存しているのであるから、いわば社会あつての個人である。その人の住むところの社会の環境によつて、著しくその思想感情は支配される。個人が良くなるも悪くなるも、その住むところの社会の空氣次第だといえる。したがつて、いつさいの罪惡の根源は社会にあると言ひうる。しかしながら、これは單に半面の解釈にすぎない。そして現代意識は、この半面の解釈に執着して、何事も、社会という漠然たる意味での存在にその責任をなすりつけようとしている。みずから省みてみずから守るよりも、何事も人と人との關係の間に生じた社会現象というに歸して、自己に直接の責任を感じようとはしない。そこで、ひとえに物を平等にし、制度を改造して、社会生活の不公平を救おうとする。もちろん、それはよいことであるが、しかし、だれが物を平等にし制度を改造するのだといえは、それについてはみないしよにその

氣になつて、かゝる改造をしなければだめだということにならう。即ち一つ心になり大勢にしたがい、世論に乗じて行わなければ、何事も成就しないという見解になるのであるが、さりとて、單に、みながいっしょにやらなければ、全体の力で行かなければ、と言ひつていてだけで、だれもひとりとして、みずからあえて進んで事を試みるものがなければ、いつまでたつても、事の始まりようはない。こゝにおいて、だれが事を開始するか、だれが身に責任を感じて行くかという眞劍の問題になると、再び個人の心の内に、その問題の解決を求めなければならぬ。もとよりすでに述べたように、多数の意志により、多数の力をかり、人々の結合關係に生まれた世論の力で行かなければ、事は成就しないといふことは明らかであるが、それが一時にばつとできあがるものではなし、人と人との關係現象から生じたといふものの、結局は、それが個人個人の心裏に根ざしていなければならぬのであるから、いわゆる社会現象の根を再び個人の心の内に探り、個人の心の内に自覺するにいたらなければ、また事實上、根柢ある社会力となることはできない。

こゝにおいて、一面には、社会が個人の内にある道理を知らなければならぬ。われ／＼ひとりひとり、それ／＼われの内に、その國家社会を持つてゐる。外面的に、もとよりわれ／＼は國家社会の一員としてその内に存在しているのであるが、内面的には、われの内に國家社会は宿つてゐる。われわれに、社会心があり國家心があるのはそれである。われの心の内に、社会的または國家的生活の意義が見出だせないならば、そのわれ即個人を幾人集めたところが、現在のよゝな社会的ないし國家的生活を形成することはできはるはずがない。われ／＼一個人は、それ／＼小社会であり、小國家であり、小宇宙である。それ故にまた現実に國家や人類社会や宇宙の一員として存在する。個人たるわれのほ

かに現実の社会生活があり、そこにある各種の思想や感情は、確かにわれの目を通し耳を介して感
知せられるものであるが、これを内面的に観察すれば、結局それらのわれの心の内に知られ感ぜら
れ思われているのでなければ、お互にわれの外にある現象だと認識することもできない。人と人との
関係結合の間になる種々の現象も、この方面から見れば、みなそれらの個人の心に取られ植えられて
成立している。この点から、いっさいの社会現象は結局個人に歸し、個人の内に收められると言つて
もよい。実に社会なるものを分析してみれば、結局個人の外には何も見出だせない。存在するのは、
個人ばかりだと言える。個人の集合にかりにつけた名にすぎぬとも言える。しかしそれはもちろん極
端な言い方であつて、個人の單なる集合として社会を見るべきではないが、とにかくある意味におい
ては、個人を以ては社会はないと言いつるのであるから、個人の内に社会的意義を十分に發見する
ことが肝心である。

二

部分は全体の中にある。それ故に全体は、部分を規制する力を持っている。即ち各部分は全体のつ
りあいから支配される。このことは明白だが、また逆に、部分は全体を作りあげる。言い換へれば、
部分から全体は生まれて来る。即ちまた全体は部分の中にあると言へるが、この道理は忘れがちな
る。枝や芽や根という各部分は木という全体の中にある。それ故に全体のつりあいから支配され、全
体の統括の下にある。さりながらまた、木は全体として一べんに伸びるのでなく、枝や芽や小根の各
部分を通して生長する。即ちそれらの部分は、さくらならさくらという木の全部の命を宿してあり、

そしてそれらの方面からその木を生かし伸ばして行く。故に部分の中に全体の生命があると言つて
よい。この道理は、個人は社会という全体関係の中に存すると同時に、個人の内に社会が存し、個人
を通して社会が生まれて行くことを例説するものにほかならぬ。われわれひとりひとは日本國民の
一員として存在するが、同時に、われわれひとりひとはそれら日本國民を代表している。即ちわ
れひとりの内に日本國民全体が宿っている。それ故に外國にでも行けば、このひとりを見て外國人は
日本人一般の性質特徴を發見しようとする。これ個人がその個人の存している社会を自己の内に持っ
ているからである。またひとりの学生は、その所屬学校の学生全体の一員として、その校風の下に呼
吸している。それ故に全体の氣風から支配されることはもちろんだが、またその学生はひとりひとり
に学生全体の精神態度をみずから表現し保有している。それ故にまたその學風が良くなるも悪くなる
も、ひとりひとりの学生の心がけによつとも言わなければならぬ。各員を通して全体の空氣は消長す
るものであるからである。

三

これだけ言えば、個人の内に社会があるという意味は、あつよを明白だと思ふ。これは正当な意味
での個人本位の見方である。更にこの論点を進めて現代を批評的に見て行こう。それについては、再
びこれまで述べて来たようないわゆる社会本位の考え方と、私が今述べた意味での個人本位の見方と
を對比することによつて、考えを述べて行こう。かの社会本位の考え方の意味のあることはすでに述
べた。ことに従來の個人的利己的態度を改造して、人は、人と人との間の關係交渉の内に化合せられ

織り出された一種共同の心力、いわば社会力によって支配されるものであるということを明らかにし、社会改造は、その共通関係を、政治上経済上に、全体の衆力によって改造されて行かなければできないと見た点は正しい。しかしながら、これは結局のところを言っただけであって、この見方、この考え方にのみとまらねば、いかにしてこの衆合力は生み出されるか、いかにして改造のもくろみは考え出されるかという方法を、積極的に教えるところはない。たゞなんでも全体の力で社会の根本組織を改造して行かなければだめだというだけで、どうしてその全体の力が生み出され、どうして改造の方針が立てられるかは、はっきりしない。たゞいつのまにか全体の力が出て来た、いつのまにか改造されるという、事実を傍観的に、解釈説明するだけのことになってしまふ。したがってまた人心が良化するも悪化するも、社会の共通組織の良否いかんによる。つまり社会全体が良いか悪いかで、そこに住む人々はいかようにも支配される。ないしは罪は社会にある、といつても、たゞそれだけを唱えていたのでは、実は責任の所在はなくなってしまう。だれもかれも、省みて自己ひとりの内に社会の罪惡を見出だすことなく、自己の外に、人と人との関係し交渉する接合点に、そしてその意味で社会全般の空氣や制度に、責任を歸して、互にこの世の中の不都合呼ばわりをしてゐたとしても、せんのないことである。互に勝手なことを注文して、權利として、社会に対して呼ばわつても、呼ばわる声がある反響するだけで、ついにそれにこたえる声は絶無である。現状はまさにそういう状態ではないかと思う。現代の人は、われとか個人とかいふ外に、社会というものを見出だした。これは、確かに大なる發見である。小なるわれの外に、大なる社会を見出だしたことは、まことに結構なことであるが、たゞわれの外に社会を見ただけで、再びわれの内にこれを取り入れ、あらたにわれの内

にこれを見出だすことを知らずにいるのは遺憾である。そこに人生いつさいの解釈を、われと人との關係に成り立つ社会そのものに見出ださんとしたのであるが、常にこれを外に求むるが故に、權利主張はいかに盛んであつても、義務責任を背負う者はない。今日は不平の声があまりに盛んであつて、われより改造に努力するものはほとんどない。互に責め怒り嘆き、困つたというだけである。場合によつては、社会に責任があるという意味が、その社会の名士・有力者に責任があるとも、またある社会團體の幹部に責任があるとも、また國家でいえば、政府当局者に責任があるとも解せられることがある。社会生活において、それらの人々の行爲方針が、全員の幸不幸に多大の關係があることは明白であつて、それらの人々が省みて大いに憤み、深く責任を重んずべきことは当然であるが、さてそう解釈して來るも、たゞ漠然と社会全体に原因を置き、責任を歸して済ましていくべきでなく、各自はそれ／＼の位置において、互に社会全体の生活の幸不幸に、直接間接に必然の關係あることを意識して、社会の改造はわれ／＼ひとりひとりが努めなければならぬことに、深く心づくべきのことである。なんとすれば、名士・有力者・幹部・役人が直ちに社会國家そのものを構成してゐるのでなく、かれらもやはりその社会國家のひとりとして、それ／＼の責任義務を背負つてゐるにほかならぬからである。したがつてそれと目ざされぬ人々も、それ／＼社会の一員として、社会の改造はまず自己の内から始めなければならぬことを自覚して、それ／＼の責任を感じずべきのことである。そしてその責任感とその改造意志とがついに合成されて、社会力となり、社会を改造する實際の力となりうるのである。こゝにおいて、世論に社会制度改造の方針に人格的基礎があるということになる。要するに、社会の改造は、みながいっしょになつてやらなければ、即ち衆意によつてやらなければ、行われな

いということは明白であるが、しかし各人が、少なくとも自分ひとりでもその改造に努力するという心持になり、われがらわれを通して、全体の力を作りあげるといふような意氣がなければ、いつまでたっても、社会改造はできない。各人のそれ／＼の責任感と努力意志とに根ざすのでなければ、全体として社会力も生み出されない。全体を作りあげるものは部分であり、社会を作るものは個人である。われの内に社会があるという見地から、少なくともわれひとりといえども、社会改造の方針に努力するという覚悟がなければ、先にも述べたごとく、たゞ声のみで眞の力は生まれて来ない。けれども、現代の人心に存する欠点は、この個人的人格的努力観のないことではないかと思う。われの内に社会を見出だして、われの力を通して社会を改造することに、われひとりといえども努力するといふ覚悟のないことではないかと思う。そしてこの覚悟と努力がない限り、いつまで待つとも、眞の社会は出て来ない。例えば綱引に勝利を得るには、みなが連帶的にいっしょに力をいれなければだめだといふことは明らかであつても、各人がそれ／＼みないっしょにといふことをのみ待っていて、みずから進んで力を出す者がなければ眞の力は出て来ない。少なくとも自分ひとりでもあらん限りの力を出してみるという用意があつて、みなをあてにすることなく互にみずから努力して、そして一致するところに、眞の力は生まれて来る。けれども、現代はこのひとり／＼の力をあえて出すことにほねある者が乏しい。諸会合によくあることであるが、この次はみながともに調査して報告しようとする約束しても、次に眞に調査して来る者はほとんどなく、各人がそれ／＼だれかがやつて来ることを予想して、漠然といっしょにやるという衆意に空頼みして、少なくとも自分だけはやつて行くことに努力する者は少ない。故に衆意の總合に待つといふことは、結局互に空頼みするといふ結果になりやすい。

これみな少なくもわれを通して衆のために盡くすといふ個人的努力が乏しいことを語るものである。

四

以上、述べたごとく、個人が社会の内にあるといふことを知るだけでは、社会改造の責任者がいない。創始者がいない。社会が個人の内に入ることを知つて、われより社会を改むべく努力するところに、責任者が出て来、また創始者が生まれて来る。前者の見方によればひつきよう、單に現実の力を認めるだけで、良くも悪くも、なるようになり、あるようにあるといふほかはないことになる。なつた時、なりつゝある時の話で、いつだれがなしはじめつゝあるかの問題に解答するものではない。そしてここに解答するものは、個人の内に入社会があるといふ見方である。この見地においてこそはじめて、社会生活の創始性・創造性なるものを見出ださう。木は芽から伸びて行くように、新社会は個人の心の中から生まれて伸び育つて行く。実に社会全体を作るものは個人の力である。例えば、世論なるものは、人々の間にもされ結合されて出て来たものであるが、それもだれかはじめに唱え出さなければ、ただ自然に出て来るものではない。世論の成れるのは成れる日に成るのでなくして、よつて来たるところがある。これは結局ある人の創意卓見に基づくところのものである。故に社会全体の力も、つまりは個人の創始性に由来しなければ、その基づくところはない。こゝにおいて、社会をわれの内に見出だす個人本位の考え方はきわめてたいせつなものとなる。そしてまたこの見地から、理想主義なるものが見出だされる。個人がたゞ社会の内に入ることを知るだけでは、個人は常に社会の現実の力に支配されるのであるから、この見地においては、現実主義よりほかに見出だせない。時の大勢に

したがうという主義よりほかに見出だせない。しかるに、個人の内に社会を見、われから社会を生むという見地においては社会を理想的見地において描き見ることが出来る。社会に支配されず、現実の狀態にとらわれず、かくあらねばならぬ理想的社会を考案することによって、これを主張して、新しい社会を作り出す原動力をなすことができる。社会改造は実にかゝる創造的、理想的見地に立つ個人的、人格的努力から生まれるのである。

(大島正徳著「思索の人生」による)

七師弟一如

一

内村鑑三と新渡戸稻造とは私のふたりの恩師で、内村先生よりは神を、新渡戸先生よりは人を学びました。両先生は明治初年札幌農学校で同級の親友でありましたから、その意味では私も札幌の子であります。しかしして両先生を教育した学風を札幌に残したるウィリアムス・クラーク博士は米國南北戦争の時、リンカーンの下に北軍に従軍した陸軍大佐でありました。

新渡戸博士は私の一高時代の校長でありました。私は明治四十三年(一九一〇年)九月に入学したのですが、その入学式に新渡戸校長のなした演説を書きとめたノートが残っています。次にこれを發表いたします。

九月十三日入学式 雨天

校長演説

旧生徒諸君、諸君はあらたに弟を得られたのである。私は子供を米國のある中学に入れてあるが、このほど歸朝して言うには、その中学では新入生が來れば、それを一、二人ずつ上級生に割り当てて、いっさいの指導監督をば責任をもってやらせ、その学校の事情に通じさせてやるということである。まことにかゝる方法は望ましいことである。新入の諸君も、上級生の顔だけを見て恐ろしいという氣を起さず、兄き分だと思ふ心持でいるがよい。

わが國の学校で最もなさないことは、訓育の欠乏していることである。イギリスのパブリック・スクール、例えばイートンやラグビーのような学校では、校長に非常にりっぱな人をすえ、その人物に対して社会は高き尊敬を拂い地位を與えている。生徒は常にその先生に私淑しているうちに、いい知れぬ感化を受けるのである。わが國でも、制度は作ればできる。人物もさがせばいるかもしれない。しかし現在のところでは、これに欠けている。わが一高なども、残念ながらこの点が不十分である。先生がたはいずれも人格の高いおかたのみであるが、その授けられるものは専門の学科であつて、人格の感化というところまでは、なか／＼手が行き届きかねる。それではだれがその不足を補うて訓育をなすべきかといえ、校長である。しかしながら、なさないかな、わがはいのごときは人格の感化皆無とも言うべきであつて、とうてい訓育をりっぱになしとげるといふようなことはできない。そこは諸君お互の友情でもって補わねばならぬ。諸君はたいにい新しい友だちを作る境遇にあることと思ふ。よく心して親しき友を選び、友情の力を借りて自己の訓育をなしとげようように努めねばならぬ。自分が敬服する人を見たならば、淡泊に話しかけるがよい。自分の方

から口をきけば、なんだか負けたように思ったり、あるいはへつらうよう得意さよしも思わぬ者もあるかもしれんが、そんなつまらぬことはない。みな平等である。

諸君も互の間、および教職員に対しては礼をするようにしたい。これはお互の帽章に対して礼をするのである。また先生がたに校外で出会うた時にも、礼をすべきである。見受けたところ、諸君の中にはめがねをかけた人も多いようだが、「どうも先生に似てるようだが、ついまちがったら悪い。」などと思つて、礼をせずにあくようではいけない。だれとまちがってあじぎをしたとて、決して悪いことはない。みなの方が偉いのである。ある名僧は会う人ごとに合掌したとさえる。

この八月はまことに忘れがたき月である。全国各地の水害で、損害額三千万円内外ということがある。世間には、あるいは洪水のため土地が肥えた所があるとか、土砂がタスカロラ海床を浅くして、そのために地震が少なくなるだろうとか、土砂が多く海中にはいったために魚族が繁殖するだろうとかいう人もあるが、こんなことはあてにはならぬ。この三千万円は絶対的の損失と見ねばならぬ。わがはいはその時強く思ったことであるが、わがこの一千の諸君の中から一生を治水のためにさしげる人はないだろうか、植林のためにさしげる人はないだろうか、また水害後の救済事業に志のある人は出ないだろうか、と思つた。

右の演説を今読み返して驚くことは、それがすさまじくだけのことです。いくらでも敵の打ちこむすきがある。実際、先生はその生涯を通し、この演説に現われているような、またそれ以外のすさまじく打ちこまれて、多くの誤解・非難・迫害を受けたのであります。少しく右の演説について、教育者としての先生の精神と、これに対する誤解・非難の点を述べてみましょう。

第一に、「わがはいのごときは人格の感化皆無とも言うべきである。」との告白が、まず人々を驚かします。もしも多少なりとも人格者とか教育家とかの自負心を持つ人がかゝることばを口にすれば、それは鼻持ちのならぬ偽善でありましょう。また実際人格の低劣な人間がこれを言えば、それは堪えがたき傲慢でしょう。しかるに先生は多くの人にすぐれた人格的感化を與えた人であるにかゝわらず、自身では人格者であるとの自覚を持たず、「わがはいのごときは人格の感化皆無」ということを、正直にそう思い、正直に口にしたのです。先生は決して欠点の少ない人ではありません。多くの人間の弱点があり、また自分でそれを知っていました。それを知る故に、これを修めることに努めたのです。一体自分で、われは人格者である、人格的教育者であると自任する人こそ、その人格の浅さが知られて、偽善者の部類に入るべき者であるにかゝわらず、世人は新渡戸博士を目して、みずから人格の感化皆無と言いながらも人に人格を説き、みずから教育者の資格を欠くと言いながら校長の地位にとまっています。かれは偽善者である、地位に恋々たる者であると非難したのです。もし先生がもつたいぶる人であつて、こんな告白を口にしなかつたならば、多くの非難を予防することができたと思われ

ます。

第二に、生徒も互に、また教職員に対してあじぎをせよ、人違ひをしてあじぎをしたとて何も恥ずかしいことはないと教えたのは、小学一年生の入学式において教えるようなことばであつて、一高校長の演説としてあまりに通俗的、常識的であるとの感を抱く人が多いでしょう。これは実際卑近に過ぎるほど卑近な教訓です。一高生徒に向かつては、もっとむずかしいことばでもつて教えた方が適當かもしれせん。しかし先生の教訓の主旨はめいりょうです。それは「みんなの人が偉いのだ。」とい

う思想です。人を人たるが故に重んずるといふ人格の観念は、先生の人生観の根本でありまして、この人生観の上に先生の平民主義が築かれたのです。しかしてこの平民主義の上に立って、先生は「社交主義」なるものを説きました。先生は日本語の表現に巧みな人ではありませんでした。先生のいわゆる「社交主義」とは sociality の訳語で、社会性というほどの意味です。それを社交主義といったものですから、世間からじよさいのない八方美人主義のように誤解せられたのです。

「お互におじぎをせよ。人違いしても悪いことはない。」この平凡な、常識的な言の中に、新渡戸先生自身の到達した精神的苦闘の成果があり、また先生の教育精神もこもっているのです。前にも述べたごとく、博士は封建時代に生まれた人です。隣の藩を見ること敵國のごとく、道路をつけるにしても、藩と藩との境界において接続しないように故意につけた時代を知っている人です。家をいざれば敵ありと思え、人を見ればどろぼうと思え、決して他人に心を許さず、おのれに閉じこもって、しかつめらしい顔をしていることが、武士のたしなみであるかのように教えられた人です。その先生が明治開國の夜明けの後、キリスト教の思想と西洋の教養とに接して、まず自己の封建的から打ち破り、次いで國民の人生観からもこのからを打ち破って、廣く明かるく温かい社会に向上せしめたいというのが、先生の教育精神でありました。そのために先生は「社交主義」を説き、人を見ればどろぼうと思わないで、まちがってもよいから友だちと思ひ教師と思つて礼をせよ、と教えたのです。こうして先生は、人格の自覚を呼び起し、個性を解放し、それに基づくあらたなる友情を刺激したのです。

第三に「互におじぎをせよ。」という卑近な校内生活の教訓から一轉して、さわめて重大な國家問題に、校長の演説は移りました。みごとな飛躍です。しかしその時生徒の中の幾人が、問題の重要性を

認識しえたでしょう。

先生のあつした事がらが、先生の学問に係ることは興味深くあります。わが國のごとく天災の多い國では、災害の予防ならびに対策の研究は、國力を養ひ民衆を救う上において大なる意味のあることであり、先生はつとにその必要を暗示した先覚者のひとりでありましたが、入学式の演説において、青年の立志発奮を促す趣旨をもつてこの問題に触れたことは、特別の興味があります。先生自身少年時代東京英語学校（後の大学予備門）に学んでいた際、卒業を前にして將來の進路を定めるに当たり、多くの者は東京大学に進んで法律・政治を学び、官界に飛躍することを夢みた中にありまして、先生ら数名は日本を開くには実学が必要であると感じて、札幌農学校の生徒募集に應じたのであります。先生らが札幌に行った時には、クラーク博士はすでに米國に歸つた後でしたが、かれの残した有名な「少年よ、大志を抱け。」「Boys, be ambitious!」と云ふことが、語り継がれたに違ひありません。先生は札幌農学校卒業後、更に学問を続けたく思つて、東京大学文学部に入学しました。その時「なんのために英文学をやるか。」と聞かれて「太平洋の橋になりたいと思ひます。」と答えたことは周知の逸話です。要するに青年が学問するには、なんの目的も立てず、たゞ漠然と惰性的に学校にはいつて学校を出るといふのではいけない。また目的を立てるにしても、自分の立身出世というよきなことであつてはいけない。何か世のため國のために盡くす志を立てて勉強しなければならぬ。そこで先生が入学式演説で、天災予防というすこぶるじみな、しかしながら永久的効果ある重要な事業のために生涯をさげける者が、この一千人の中から出ないだろうかと呼びかけたのは、先生自身の少年時代の立志と思ひ合わせて、さわめて暗示的な話でありました。

先生は大正二年（一九一三年）四月、一高校長を辞しました。四月二十六日生徒一同を集めて新渡戸前校長の告別演説と瀬戸新校長の就任演説とがありました。その時の先生の告別演説と、送別の模様を書きとめたものがあります。こゝにその拙稿を轉載することにしましょう。

「わがはいがこの学校に就任して来たのは三十九年九月で、今より足かけ八年前になる。青年がすきでしばしば接してはいたが、教育ということは知らない、ことに教育行政のことは少しもわからぬ自分のこと故、せつにお断りしたが、時の文相牧野男があつく勧められるので、感情的なわがはいは、いわゆる意氣に感じてこの経験なき職に就くことになったのである。しかし、自分で借金してでもよいから、一年ばかり外國をめぐり、校長学を研究させてもらいたい、ことに英國のイートン・ラグビー・ハロー等のバブルック・スクールを訪い、いかなる人が校長となっているか、校長はどんなふうにやっているかを見て来たいと言ったら、牧野男は今日の場合、日本ではなんの職に就くにしても、わざわざその準備をする暇はないと言われたのである。それで就任はしたものの、まず六箇月、長くて一年と思つて、そのつもりで面会の家も借りた次第であつた。前にも言つた通りこまかい事務は見なかつたけれども、外に對する責任はいつも自分が負つて来た。諸君は知らないかもしれないが、わがはいはたび／＼当局よりおしかりを受けた。一々言うにもおよばぬが、ちよつと例を挙げれば、わがはいが就任の當時、運動場にはでこぼこがあつて体操もできにくいし、野球などにも不便であるとのことを開

いて、もつともであると思つて今日のごとく平坦たいへんにさせたのであるが、それが會計法とかに触れておしかりを受けたのである。また諸君の持つておられる校旗、あれほどりっぱな旗を持つてゐる学校はほかにないであろうが、あれを作らせた時あまりりっぱだといつておしかりを受けた。かくのごとくたびたびおしかりも受けるし、また職をむなしくしたとの非難もすいぶん受けた。しかし弁解ではないが、わがはいの精神のあるところも見てもらいたい。わがはいは事務のことは知りもしなかつたし、知ろうともしなかつた。教育は事務でない。教育は精神である。自分の精神として来たところはなんであるか。第一は國を愛するということである。それはことばではない。その精神を日常生活に表わすということである。一つの小さい善いことをするにも、一つの悪いことを抑えるにも、これが國を愛するゆえんだと考えて、日常生活とこれとを連絡せしめんと思つて来たのである。第二は諸君をなるべく自由に伸ばしたいと思つた。わがはいは元來事なかれ主義を取るものでない。ある程度までは事を越える時には注意もするし、罰しもしたが、秩序を乱さない限りにおいて自由に任せた。日本人は幕府政治を経て来て、いまだ伸びが足りない。才能が十分に發揮されていない。それをできるだけ伸ばしてやりたい。一つの型にはめるといふことは最も教育の本旨にもとつてゐる。わがはいは諸君にできる限りの自由を與え、外に對する責任はみずから引き受けて来たつもりである。第三は品行よりも品格ということを重く見ている。人の根本をつくるべき性格の修養ということを常に言つて来たつもりである。自分はこの三つをよもな精神として夢寐も忘れずにやつて来た。諸君は必ず思い当たってくれるであろう。そこで瀬戸君に言つておきたいことがある。新校長は他の高等学校教授の任に当た

られたこともあるし、文部省でも主として高等学校のことを担任され、わがはいが文部省に行っても、大臣よりも次官よりもまず瀬戸君に話をするというふうであるから、よく一高のことも御存じとは思いますが、あたまからひとつ改革してやろうなど思つて來られては、あるいは大まらがい來たすであらう。さのうは滞りなく事務の引き継ぎができたが、さのうは生徒の引き継ぎをするのである。新渡戸はやくざな生徒を引き継いだという御心配はないことと信ずる。さのうもこまかい事務はたいい堀先生に引き継いでいたといたが、生徒の話になるとわがはいが引き受けて、こんな話もある、こんな生徒もいると長くお話をしたのであった。在職中ずいぶんけしからんことも聞いてむっとすることもあつたが、またちもしろい美しい生徒にもずいぶん会つた。何が愉快だといつても、まじめな生徒と話をするほど愉快なことはない。世間ではよく美談美談ともてはやすが、この学校へ來れば二十四孝ぐらいでない、五十孝も百孝もいる。瀬戸君には断言してもよいが、あなたがこの学校へ來れば二十四孝に比べて、今の生徒は決してまじめが劣るものでない。いな、ある意味においては進んでいゝと思ふ。もちろん、形は異なつて來たところがある。二十五、六年前といえればわが國教育界では上古ともいふべき時代である。形式の違つて來たのはあたりまえである。たゞ精神を見てもらいたい。

わがはいは在職中のことを顧みて、元來感情的なわがはいはちり／＼失敬なことも耳にしてむっとすることも多かつたが、これもみな若い人故と、ひとつは努めもして、なるべく忘れてしまいたいと思つて來た。

わがはいがこの学校にいてなしたあやまちは意識しているのでもずいぶんある。意識していないのはいくらあるかしまい。諸君においてどうかこの際これらのあやまちを許してもらいたい。できることなら忘れてもらいたい。諸君許してくれたまえ。」

泣かじと齒をくいしばつてはいたが、堪えかねてしば／＼泣いた。泣いたのはぼくひとりではない。ぼくの隣に立っていた一年の人は声を立てて泣いた。一滴の涙も出なかつた人は、おそらく一千人の生徒のうちひとりもなからう。あゝ、これなんの涙ぞ。なんの涙ぞ。自分は顔をあげえなかつたが、たゞさのうは生徒の引き継ぎをすると言われた時、いかにも晴れやかな顔を仰いだのみである。終りの方になつて、先生のお声はたいへんふるえて、しば／＼とたえさせした。壇をちりていすに着かれた先生が、白いハンケチを取り出されたのをぼくは見受けた。あゝ慕わしき先生、そのお姿、そのみことば。

五月一日午後三時半から嚶鳴堂で新旧校長の送迎会があつた。新渡戸先生はこの日も一時間ばかりお話をされた。教育には人格の薰化が最もたいせつなことや、夜中でも、火事といえはすぐ本郷の方を見た後でなくては眠れず、地震といえは直ちにあの三階（旧寮の寢室）は、と氣苦勞のなか／＼多かつたことや、この会合を催されたのは校長の更迭の際に行う儀式の一つかもしれないが、わがはいは欺かれてもよい、正直にこれを厚意として受けたいということや、トム・ブラウンの話の引いて今より十年の後、あるいは自分の死後、諸君の中になつたひとりでも自分を解し、あの時にかく言つた、この時にこう言つたと思ひ出してくれるかたがあれば、実に本望のいたりであるということなど話された。次いで瀬戸新校長のごあいさつ、教授・大学生および生徒有志の演説あり、これが終つてからすぐ食堂へ行って晩餐会が開かれ、新渡戸先生は校長としての最後の晩餐をわれらとともにせられ、かつ日本人に最も欠けているのは人格の觀念ではなからうか、人格のないところに責任は生じないな

どのお話があり、その他諸先生のお話があった。瀬戸校長は生徒が新渡戸先生に示す厚き情誼を見て、感激に堪えぬという意味を晝も夜も述べられた。

晩餐会は八時半に終つて、全校生徒は寮委員の計画により校門まで先生をお送りした。しかしわれわれ有志は更に先生を小石川のお宅までお送りし、かつわれらの至深の感謝と愛情とを示し、先生および夫人のお目を慰めお心を喜ばすために、花かごを贈りたいと計画していた。それでこの日はじめて先生にこの計画の一端をお知らせし、御自宅までもに徒歩せられんことを請うた。雨はやんだが星も出でず、ことに道路の泥濘どろみはなはだしかったが、五、六百の生徒は先生を擁して校門を出で、みな先生のそばに行こうと思つたので足並みはたいへん速く、またたく間に御自宅まで来た。何も知らぬ夫人はかつ驚きかつ喜び、先生とともに玄關に立たれた。夫人は先生の良友であり、また生徒を心より愛し認められている。われらは玄關前のじやりの上に踞すまして、あるいはふしあるいは先生の顔を仰ぎ、語らずしてすでに涙ぐんでゐる者もある。やがてこのたび特に作つたもので、歌も譜も、よく感謝と惜別の情を表わせる送別歌をうたつた。

次に発起者總代から涙ながらのあいさつがあった。このあいさつちゅう、踞すませる数百の生徒は泣き続けてあつた。これが通常の別れを惜しむめ、しい涙と同一であらうか。質素剛健を標榜ひょうぼうせる一高生は、また情に感じてよく泣く青年である。そのあいさつの大要は、

「諸君は今、新渡戸先生を先生の最も愛せらるる一高よりこゝまでお送りして来た。先生は今、先生の良友にしてかつわれらを愛しく下さる夫人とともに、諸君の前に立つておられる。さう先生は、欺かれてもよい、諸君の厚意を正直に受けたいと言われた。諸君、われ／＼は先生を欺いてよいだらう

か。先生をお欺き申してはならぬのである。思えば先生はまことにわれ／＼を愛され了解してくださつた。われ／＼を愛せらるるあまり、世の中や当局から非難も攻撃も受けられた。われ／＼はこの知遇に報いないでよからうか。われ／＼故に先生は、どのくらい神経をいたため健康を損ぜられたらうか。諸君、小石川の方に火事があればまず先生のお宅はと氣づかい、地震があれば小石川の高台は、と第一に思はうではないか。あの高さ人格と、せつなる愛情とをもつてわれ／＼を導かれた先生を、校長としてはもはや仰げなくなつた。しかしわれらの慕いたてまつる人格者として、いつまでも先生を仰いで行こうではないか。諸君の胸中には必ず先生のまかれた種子があるに違いない。その種子を養ひ育て、先生が平素より訓えられたる、よりよき日本の建設を志し、精神的の向上を助けるように決心しようではないか。これわれ／＼が先生に報いたてまつる最大のことである。しかしわれ／＼はさうのこの別れを記念して、われらの思慕の情を表わすため、諸君の賛同によりてできた花かごをさしあげたいと思う。その一つは造花であつて、長くは持つが香も生氣もない。他の一つは生花であつて、新鮮なる色香はあれど数日を出でずして凋落しよくするであらう。しかし、われ／＼の思慕の情は生花かごのごとくに新鮮にして、かつ造花かごのごとく永久にあせないであらう。かくて大正二年五月一日という日は、われ／＼にとりて忘れがたき日となつた。」

かくて二つの花かごは、われらの最も單純なる心より、真心の感謝と温かさ同情、愛と尊敬とのしるしとしてわれ／＼の切愛する新渡戸先生およびその夫人にさしげられた。一同は声をひそめて起立した。夫人と先生との涙ぐみたるごあいさつあり、万歳が三唱され、先生と夫人とのために三分間黙禱もくたうをなして後、われらは靜かに先生のお庭を出て行つた。去りがたげに玄關にたゞずんでゐる者も

ある。ことに数名の中國留學生はなつかしげに先生にお別れを述べた。先生は試験がすめばうちそろって、留學生全部で来るようにと言われた。あゝ先生を校長より失うことが、ことに留學生にとりていかに惜しくさびしいことだろう。

送別歌を低唱し、あるいは先生のみ教えに従い、小ながら日本の理想のため盡くさんと、固く心期しつゝ寮へ歸つたのは十一時、ちょうど電燈の消える時であった。

その翌年五月一日の記念日に、われ／＼は帝大山上御殿に集會して先生をお招きした。先生は非常に喜んで出席してくださった。その時お宅からはち植えのつゝじを持參せられて、テーブルに置いてくださった。小さいつゝじがはち一面に群生して、火のように満開であった。われ／＼はたゞ先生が一座の美觀を添えるために持參してくだされたものだと思つた。會は進行して先生のお話となつた。そしてこのつゝじこそ、昨年の今月今日われ／＼が先生を小石川のお宅にお送りした時にさしあげた花かごの中から、夫人がお庭におろされたさし木に根がついたものであるとかうかゞつて、われら一同は感激の電撃を受けた。われ／＼が先生の恩愛を記憶する以上に、先生御夫妻はわれ／＼を記憶してくだされたのであつた。

この時つゝじを英語で *rose* ということを先生から教わつて、われ／＼はこの會をアゼリア會と稱し、毎年五月一日に先生とともに集まることにした。この會は数年続いた。多くは先生が小石川のお宅へわれ／＼を招いてくださった。

何年も何年もたつた。先生は國際連盟の重任を果たして歸朝せられた。先生は頭髮は霜となり、私

もいつしか帝大教授の末席につらなるものとなつていた。ある日おたずねした時、先生の言われるには、

「あのすぎの木はだいぶん大きくなり、庭では他の木の陰になつて伸びないから、門の外の廣い所に出したよ。門の外の右側にあるのがそれだよ。」

「あのすぎの木。」私はすっかり忘れていたが、これこそあの大正二年五月一日にお贈りした一高生の花かごにあしらつてあつたすぎの小枝をば、つゝじといつしよに庭にさされたものが根づいた後日の姿である。幼き一高生の小さい愛情をば大地におろし植えて、花咲かせ、枝茂らせ、これをいつまでも記憶せられた先生の愛。そしてすぎのこずえをできるだけ伸びさせるため、廣き場所に移し植えられた先生の愛。小日向台町こひなただいの新渡戸家門前のすぎは、こうした先生の愛と教育精神との天然記念物なのである。

(矢内原忠雄著「余の尊敬する人物」による)

八 学校日記

学校日記は、学校全体の出來事を書きとめて行く日記である。これは三年生が当番で書いたもので、断片的ではあるが、学校の行事やありさまなどをうかがうことができ、また、卒業が近づいた氣持も読みとることができる。これで、いよく卒業となれば、長い間の学校生活へのいろ／＼な思い出や反省が生ずるのであらう。それらを通して、將來の希望や心構えを持つようになりたい。

これは学校日記の一例であるが、めい／＼の学校では、またさまざまの形で書き記されていることであろう。ともかく形にとらわれないで、楽しいまた確かな記事が続けて行くことが望ましい。そうして、学校生活のありさまが、その日その日、記録されることによって、來年度の学校生活が、更に高まって行くような手がかりをほしい。生徒の手によって、学校にりっぱな記念を残そうではないか。

月 日

校内を一巡して、戸締まりをする。どこもよく氣をつけてあった。このごろになって、そうじが行きとどくようになって來た。寒さに負けないで、みんないっしょになって働いたおかげである。長い廊下を歩いていると、もうあと幾日もこの学校にいないのだということが、ふと思われた。

音楽教室では、おそくまで、プラスバンドの練習をしていた。卒業式当日の感謝会で演奏するためだ。

月 日

第一時限の全校講話では、校長先生が、「生活をたいせつに」というお話をなさった。生活にあまえたり、なれっこになつたり、軽んじたりしないように、たとえ小さな事からでも、よく氣をつけること、考えることが大事だとおっしゃった。

例話として、レンズみがきのスピノザと、りんごを見て考えたニュートンと、星の運行のような生活をしたカントのことがとりあげられた。哲学の世界は身近なところにあるという興味の深い講話であった。

月に一度の、楽しみにしていた校長先生のお話も、もうこれでおしまいになった。

月 日

全校の自治例会が開かれた。きょうは、二年生にすべて準備や司会をしてもらった。なか／＼よくできた。安心して二年生にすべてを譲って行けそうだ。

学校新聞が発行された。「下級生に與える」「卒業に際して」の二文が光っていた。この号は二年生が主となってその編集に当たり、その発行に当たったが、記事もおもしろく、わりつけも氣がきいており、特にさし絵やカットは今までにない新鮮なものが掲げられてあった。従來の型を破って、生き生きとしたさばくな感じがあふれている。新しい知性と感覺がすぐあとから伸びて來ていると思つた。

月 日

各学年の体重測定グラフを作製して、掲示板に発表した。去年のに比べて、いくらか増していることがわかる。

午後、講堂でレコードコンサートがあった。三年二組の田口さんが解説をしてくれた。いつもながらよくわかるじょうずな話である。きょうはドビッシーの作品ばかりであった。

月 日

國語クラブの発表会があった。「詩の組」では、みんなで作った作品を朗読した。「隨筆の組」では、このごろのおもな社会の出来事についてのおもしろい感想発表があった。

「物語の組」では、ドン・キホーテの筋とその価値について説明し、「演劇の組」では、「出発」という脚本を実演した。新制中学校を出た少年少女たちが、めい／＼の希望に燃えて、それ／＼輝かしい出発をして行くという楽しい詩劇であった。

すんでから、太田先生を中心に、きょうの発表会についての話し合いがあった。

月 日

静かな雨だ。いよ／＼あすは卒業式である。式の予行演習があった。

三年生が集まって、卒業記念に、何か学校に寄附をしたいと話合った。記念樹を植えて行こうと言う人もいた。ラジオ装置の修繕をしておいた方がいいと言う人もいた。どうしてもミシンがいると言う人もいた。掲示板が足りないから、新しく作ってほしいとか、野球の道具をそろえたいとか、いろ／＼の意見が出た。

けれども結局、図書室を充実するために図書費を寄贈することにきまつた。

成績品陳列のために、おそくまで居残っている人もいた。

月 日

すっかり空が晴れあがった。本校卒業式のために、自然が大きな贈り物をしてくれたように思われ

た。父兄もあ／＼ぜい参列した。

式は、りっぱにできた。校長先生は、最後のことばとして、「美と真とを愛せよ。」ということをお話された。

在校生送別の歌は、胸にしみた。

山田君が答辭を述べた。愛校の精神と感謝の念にあふれたものであった。

式後にぎやかな感謝会が開かれた。

いつのまにかうす暗くなってしまう。

すんでから、教室で太田先生とお別れをした。文字通り「万感こも／＼いたる。」であった。

教室を立ち去ろうとして、ふと黒板を見ると、いろ／＼な文句が書かれてあった。まるで寄せ書のようになかつこうになっていた。

「もうじき春が来る。明かるい春が来る。」

「親切だった小使さん。いつまでもお元気で。」

「思い出の校庭のポプラよ。」

「講堂の大時計よ。」

「あすから新しい第一歩が始まる。」

國語學習の手引

中等國語三(3)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝにしるさない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題	目	原作者	訳者
一	雪の朝		草野心平	絶景
二	自然の美と美術の美		岸田劉生	美の本体
三	噴火山		アンデルセン	即興詩人
四	読書について		谷川徹三	読書について
六	社会を自己の中に		犬島正徳	思索の人生
七	師弟一如		矢内原忠雄	余の尊敬する人物

國語学習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行つてほしい。

一 雪の朝

- (1) 「雪の朝」は何をうたつてているのか。
- (2) 「空」を読んだ感想を話し合う。
- (3) 朗読をくふうする。そしてお互に聞き合う。
- (4) 冬の自然の風景に取材した詩を作つてみる。
- (5) 今までに学習した詩につき、定形詩と自由詩とを比べてみる。
- (6) 自由詩と散文とどこが違うか。

二 自然の美と美術の美

- (1) 次のことがらについて作者の見解を調べる。
- イ、自然の美。
 - ロ、自然の美を表現し盡くせない原因。
 - ハ、自然の美と美術の美との違い。
 - ニ、美術における主観的の見方と客観的の見方との違い。
 - ホ、美術の美の独立。
 - ヘ、美術がこの世界における美の客観的な唯一の存在であるわけ。
 - ト、人工のほんとうの意味。
- (2) 次のことばの意味を考えよ。
- イ、自分の絵は常に描き足りない未完成のものであるけれど、もし他人が自分にそういうことを言えば、自分は許さない。
- ロ、ソロモンの栄華の極みもゆりの花の一つに及ばない。
- (3) 美についてめい／＼思っていることを話し合う。

三 噴火山

- (1) この文を何度か読んで、すらく／＼と読めるようにする。

四 読書について

- (1) 読書の基準五つを短くまとめる。
- (2) それを作者のまとめた四つの命題と比べてみる。
- (3) 自分の読書について反省し、次の間に答える。
- イ、多読か、精読か。
 - ロ、第一、第二の矛盾をどう処理しているか。どう処理したらいいか。
 - ハ、第三、第四の矛盾をどう処理しているか。どう処理したらいいか。
 - (4) 中等國語三(一)「八 製作の方法」(五十二頁)と、本課(二十二頁)とを比べて、もう一度古典の意義や価値を考えてみる。
 - (5) 自分の読んだ本を書きあげてみる。それについて話し合う。

五 隨筆二題

- (1) 枕草子の作者が春、夏、秋、冬に見つけた趣や木の花のことについて話し合う。
- (2) 徒然草の四つの文につき、作者の趣味性や知性などを話し合う。

- (3) 枕草子、徒然草の他の章段を読む。
- (4) 次の語句を、本文に即して説明する。
 をかし あはれなり つき／＼し めでたし いみじ すさまじ あやし
 あいなし 心もとなし こと／＼し 懈怠の心 聖人のいましめ 慢心
 おとなし 心づきなし
- (5) 今まで読んだ随筆の中でどんなのが好きか、その理由を話し合う。

六 社会を自己の中に

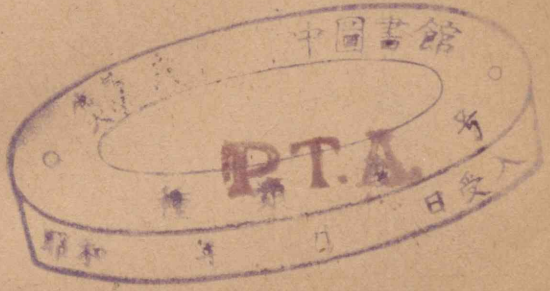
- (1) 作者の見解を短くまとめる。
- (2) 社会本位の見方と個人本位の見方とを比べ、各自の考えを話し合う。
- (3) 次の題の一つを選んで文を書く。
 社会と個人
 権利と義務
 生活をかえりみて
 これからの生活
- (4) できあがった作文を発表し、それについてめい／＼の意見を述べ合う。

七 師弟一如

- (1) 読後感を発表する。
- (2) 新渡戸先生の人がらについて、本文に即して話し合う。
- (3) 師弟一如ということについて、みんなて話し合う。
- (4) 「忘れえぬ先生」という題で作文を書く。

八 学校日記

- (1) 本課を読んで、自分たちの学校生活と結びつけて話し合う。
- (2) 「学校日記」「学級日記」は、それ／＼どういう態度で書いたらいいか。個人の日記とどう違うか。
- (3) 母校に残す記念のことはを考え、その寄せ書きを作製する。



広島大学図書

0130130449677

